

縄文時代後晩期の玉と攻玉

－ 攻玉遺跡の特徴と地域性の再検討－

小林 清 隆

はじめに

縄文時代の石製玉類は、その種類と素材となる石材の組み合わせにより、時期的な特徴が見いだせるという。大賀克彦氏は、「縄文時代の玉は、資料的なまつまりから、早期後半～前期の滑石、蛇紋岩、軟玉等の塩基性変成岩を素材とした塊状耳飾や各種の垂飾品、中期を中心とした翡翠製大珠や琥珀製玉類、後期後半～晩期の翡翠製勾玉・丸玉と結晶片岩様緑色岩製勾玉・管玉・丸玉などに区分して議論が行われている」と捉えている(大賀2008)。また、大坪志子氏は九州地域の玉研究の一環から、縄文時代を代表する石製装身具として①塊状耳飾、②大珠、③勾玉・管玉・小型の石製装身具の3つを挙げている(大坪2015)。2人の見解に示されたように、塊状耳飾、大珠、勾玉・管玉・丸玉・白玉といった玉類は、それぞれ前期、中期、後晩期の指標といえよう。

各時期を代表する玉は、いずれも原石の入手から始まり、穿孔から仕上げ研磨を経て成品となり流通する。それらの玉を生産していた遺跡について、水ノ江和同氏は、「縄文時代では、原石や未製品や工具が纏まって出土して、特定の装身具や道具を専業的・集中的に製作した遺跡(あるいは遺跡内の特定の場所)を工房とし、それに専属的に従事する人びとを組織としてとらえてきた」と(水ノ江2007)、生産遺跡を定義している。

玉の生産遺跡、以下は「攻玉遺跡」ということにするが、前期や中期では限定的な地域に存在し、成品が周辺地域や遠隔地まで流通する状況がみられる。その好例は、中期に盛行する翡翠製大珠で、新潟県糸魚川市周辺から富山県東部の翡翠原産地地域に攻玉遺跡がほぼ絞られているといえる¹⁾。また石材ではないが、琥珀製の攻玉についても、産出地を近傍に控える銚子市の粟島台遺跡が古くから知られている(大場1952)。この時期は素材の産出地の近くに攻玉遺跡が発見されていることが特徴として挙げられよう。そして大珠の素材として選択された翡翠については、後晩期にいたるまで玉の石材として主要な位置を占め、継続して使用されていたことは、各地から出土している成品が如

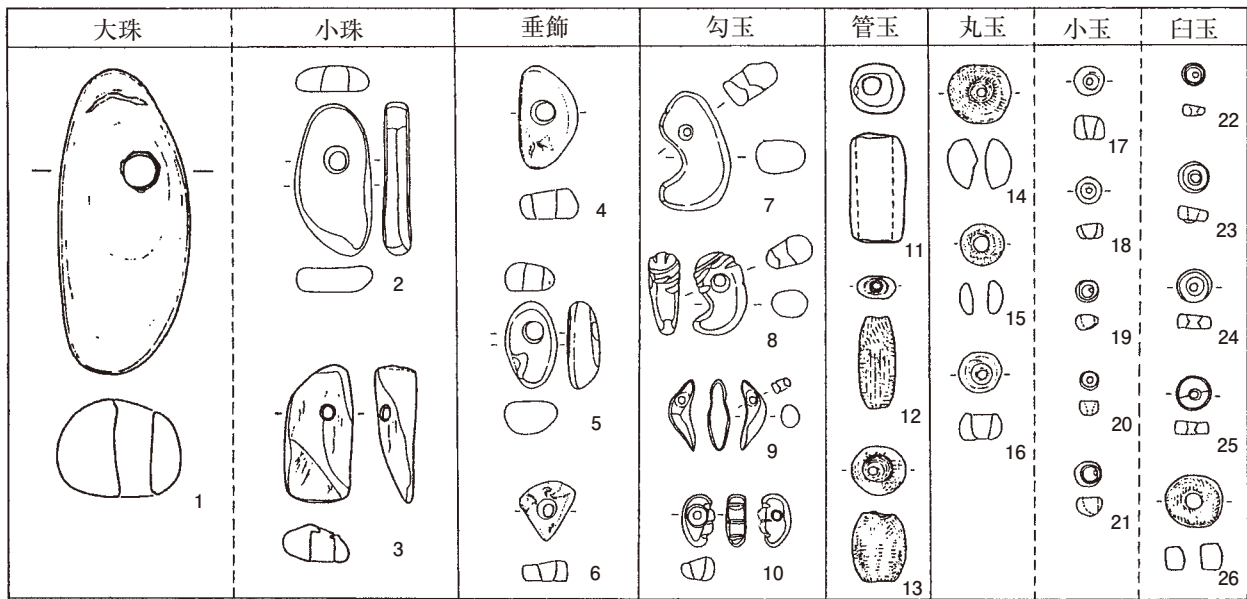
実に物語っている。

しかし、単独で着用していたと考えられる大珠とは異なり、後晩期に盛行する垂飾・勾玉・管玉・丸玉・小玉・白玉等の小型の玉類は、しだいに複数個を組み合わせるか、多数を連ねて連珠として用いることに意味を持つようになると考えられている。このような小型の玉が主体になる時期になると、玉の石材に多様化が認められると同時に、攻玉を行っていたと推測される遺跡が、翡翠産出地から離れた地域、例えば千葉県などにも出現してくる。そして、近年では県内においてその増加傾向がみられる。斯かる状況を踏まえ、当地域と他地域の玉や攻玉の特徴について再検討しておくことにした。

1 県内の攻玉遺跡

千葉県内の攻玉遺跡を具体的に明らかにしたのは、千葉県教育委員会が昭和58年から3か年をかけて実施した『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』である(寺村ほか1986)。報告書では攻玉遺跡4か所が紹介され、後晩期の遺跡として、印西市竹袋遺跡(以下天神台遺跡)²⁾、大多喜町堀之内上の台遺跡の2遺跡が取り上げられた。平成4年に(財)千葉県文化財センターが「玉」をテーマにした研究をまとめた際に4遺跡を抽出し(小林ほか1992)、その後さらに類例を加えていった(小林2004)。小論では新たな事例として、我孫子市に所在する下ヶ戸貝塚並びに下ヶ戸宮前遺跡を紹介することになっている。

かつて筆者が取り上げてきた遺跡の中から(小林2017)、報告書が刊行されている調査例を主な対象として、原石、未成品、成品を検討し、玉の種類、石材、穿孔方法、工具、工房の存否などの特徴を抽出し、攻玉の行われた時期について、可能な限り絞っていこうと思う。また、これまでに調査経緯などの概要について述べた遺跡については、簡単な記述にとどめることとした。なお、玉の名称については、曖昧な部分を残しているが、すでに提示している第1図の分類に基づいて行うことにしたい(小林2017)。



第1図 縄文時代後晩期の玉器分類(小林2017から転載)

1祇園原貝塚、2・5・8~10・19~23直貝塚、3・11武士遺跡、4・6・16~18宮内井戸作遺跡、12~15・26上宮田台遺跡、24・25六通貝塚

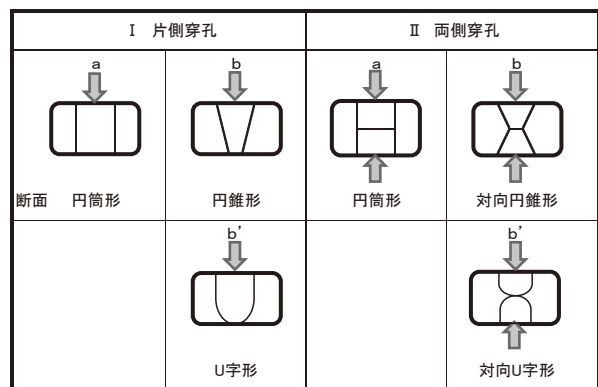
下ヶ戸貝塚

県の北西部の我孫子市に所在し、北側は現利根川を臨み、南側に手賀沼が存在する標高16m~17mの台地上に立地する。また、下ヶ戸貝塚の北西部は、下ヶ戸宮前遺跡として集落の調査が行われている。したがって下ヶ戸宮前遺跡は、下ヶ戸貝塚の一部ということになる。

玉器が出土している第6・7次調査と第11次調査の調査について、報告書が令和3年に刊行された(石田ほか2021)。第6・7次調査では、遺構外から翡翠製の勾玉1点と白玉1点の成品のほか、白玉や小玉の未成品あるいは攻玉途中での破損未成品7点が掲載され、図示していない翡翠や滑石の細片が多数発見されていると報告されている。成品の2点の石材は翡翠で、未成品類では翡翠が5点、滑石が2点となっている。

穿孔方向は全点片側穿孔である。ここで第2図に示した穿孔断面形状模式図に当てはめればI bになる³⁾。攻玉用とは決められないが、板状砥石や手持ち砥石が出土している。時期については、加曾利B式土器を中心に安行3a式土器も認められ、この間の所産になることが濃厚である。

第11次調査の遺構外からは、小玉2点、丸玉2点の成品と、3点の破損未成品と翡翠原石3点が提示されている。成品と破損未成品はすべて片側穿孔のI bが行われている。出土している土器は、後期の堀之内1式土器~晩期末葉の荒海式土器で、中心は加曾利B式



第2図 穿孔断面形状模式図

土器である。

この報告では柴田徹氏による岩石種鑑定が行われ、95点が原石とされ、「滑石が30点33%と最も多く、次いでヒスイが21点23%、アベンチュリン石英が14点14%、石英が5点、流紋岩が3点、チャート類が2点、メノウが各1点、その他・不明が19点」という同定結果が示されている(柴田2021)。滑石や翡翠の原石は玉器の素材と考えられ、アベンチュリン石英や石英の原石も玉の素材として持ち込まれた可能性が高い。

出土状況等の詳細が提示されていないので、工房が存在するか否か不明な部分もあるが、多くの原石や未成品類の存在から、攻玉遺跡と考えられる。報告者である石田守一氏も「原石の存在からヒスイやアベンチュリン石英を利用した小玉の製作も行われていた」と推測し、「日常での使用および交易品にもなったこ

とであろう」との想定を示している。

下ヶ戸宮前遺跡

下ヶ戸貝塚で概略をふれたように、下ヶ戸宮前遺跡として調査した範囲は、貝塚の北西部にあたり、貝塚遺跡の一部になる。昭和56年に調査が行われ、報告書が平成26年から平成30年までに7冊が刊行された。

玉類については、『下ヶ戸貝塚Ⅴ』にまとめられている(石田ほか2018)。成品と確認できる多くが竪穴住居から出土している。勾玉2点と丸玉1点が安行3b式期～安行3c式期の04号住居跡から出土し、垂飾3点と小玉・丸玉等6点が安行3b式期の05住居跡から出土している。さらに単独で出土した成品7点や、遺構外から未成品4点が出土し、原石1点が存在する。未成品の1点は白玉で、もう3点については、小玉の未成品とみられる。この3点と原石1点の石材は翡翠である。ほかの石材は滑石6点やアベンチュリン石英などが存在する。

翡翠製の成品は、片側からの穿孔が大部分を占め、断面形状は円錐形状のⅠbを呈する。やや大形の垂飾は両側から穿孔が行われ、孔はほぼ中央で貫通し、断面形状Ⅱbである。

砥石が192点図示されているが、攻玉専用として使用された砥石は特定できない。

子和清水遺跡

遺跡は千葉市花見川区の花見川水系に属する標高24mの台地上に立地している(築瀬ほか1987)。縄文時代前期や中期の遺構のほか、晩期の土器集中が4地点に検出され、その主体は千網式で、荒海式も認められる。

攻玉関連の遺物として12点が報告書に掲載されている。欠損品と推定される勾玉1点と、管玉未成品に比定可能な1点のほかは、研磨痕を認める不明未成品2点と垂飾未成品1点が存在する。石材は勾玉欠損品のほかは滑石である。穿孔に関しては、その段階まで進捗していないので不明である。ほかに報告書に掲載されていない剥片類が8点存在する⁴⁾。

成品は垂飾2点と丸玉1点が出土しており、いずれも両側から行われており、Ⅱbの断面形状を呈する。工具類に比定可能な遺物は発見されていない。また、工房と呼べる施設的な場所は存在しない。

攻玉の時期については晩期後葉の千網式期と考えられる。

武士遺跡

市原市を流れる養老川中流域の東岸に位置し、標高約75mの台地上に立地する(高柳ほか1996)。晩期に比

定可能な竪穴住居や土坑は未検出であるが、遺物集中地点が2地点で検出され、その第1集中地点から晩期末葉の土器群に伴って玉類や未成品、原石が出土している。

関連の遺物総数は48点である。報告書における内訳は、完成品27点、欠損品3点、準完成品4点、未成品12点、剥片2点で、完成品では白玉18点、丸玉2点、棗玉状5点、垂飾2点になると説明されている。また、成品と未成品の区別が困難なものもある。報告書で棗玉状に分類されている玉は、1点が丸玉、4点が管玉に分類できよう。筆者が再分類した点数については第2表に提示したとおりである⁵⁾。ここでは、未成品と成品の点数から判断して、白玉を主体にした攻玉が行われていたと推定され、さらに管玉の攻玉も想定される。白玉の穿孔途中の未成品を観察すると、いずれも両側から穿孔されており、Ⅱb・Ⅱb'の断面形状を呈する。また、成品である管玉も両側から穿孔している。

白玉と管玉の石材は、報告書中蛇紋岩と鑑定されているが、磁鉄鉱の結晶を含む滑石になるかもしれない。ここでは報告書にしたがい蛇紋岩としておく。原石は、濃緑色や灰緑色の発色を呈することから、数個が使用されたと考えられる。工具に比定可能な遺物は認められない。

これらの成品や未成品が出土した地点は、晩期の千網式土器が集中する地点であることから、千網式期に行われた攻玉による遺物と判断して大過ないとみている。しかし、工房の存在は確認できない。

余山貝塚

遺跡は千葉県の最東端に位置する銚子市の中心街から北西方向の位置に所在し、利根川下流域右岸の標高4m～7mの微高地上に立地する。何度も発掘が行われたが、高田川河川改修に伴い実施した成果が目され、玉類が合計で21点出土した(石橋ほか1991)。

21点の内訳は、丸玉・小玉の成品12点、丸玉破損成品1点、管玉1点、未成品5点、原石2点である。石材は丸玉・小玉成品の4点と、丸玉欠損成品1点、未成品2点が翡翠で、ほかは蛇紋岩である。翡翠の未成品はⅡbの断面形状で、成品は翡翠・蛇紋岩を問わず多くの断面形状がⅡb・Ⅱb'になるが、一部にⅠaの可能性が高いものがある。

また、攻玉専用とは断じられないが、多数の砥石が出土している。遺物は包含層からの出土であり、この調査での工房は確認できない。

包含層からは加曽利B式土器から荒海式土器までが

出土しており、その中でも晩期後葉の土器が充実している。玉類の厳密な時期比定はできない。

このほかに伊藤陸憲氏所蔵の玉類に目を見張るものがある。伊藤氏が長年にわたり採集された遺物については、國學院大學考古學資料館から発刊された『余山貝塚資料図譜』に一部が紹介されている(青木ほか1986)。この図譜での縄文時代の玉類は14点で、勾玉、丸玉、白玉、未成品が認められる。伊藤氏は、その後現在に至るまで余山貝塚周辺を丹念に調査され、今では採集した玉関連遺物の点数は30点を数えるに至っている⁶⁾。

小論最終ページの図版に掲載した玉類が、伊藤氏所蔵資料である。これらの資料の計測値は付表に一覧として載せた。

堀之内上の台遺跡

夷隅郡大多喜町に所在する。清澄山系の東方に源を發して北流する夷隅川は、大多喜町付近で激しく蛇行し、3方が川に囲まれる標高51m~54mの狭小な舌状を呈する台地上に立地する。昭和53年に1,056㎡を対象にした発掘が行われた(寺門1979)。

玉類は管玉(報告書では棗玉)成品1点、同破損成品1点と未成品1点、白玉成品1点、白玉未成品8点が出土しているほか、多くの滑石原石と剥片が出土していると報告されている。原石と剥片は75点以上になり、ほかに剥片や管玉の両側穿孔を開始した未成品1点が表採されている⁷⁾。原石は、図版に掲載したように、比較的大型のものが数点出土している(図版左上長さ77mm)。工具として使用可能な砥石類が出土しているものの、攻玉に使用した砥石を抽出することは難しい。

穿孔方向は、管玉が両側から行われ、断面形状はⅡbと推察され、白玉はⅠbとⅡbの2者が存在する。

ここでは管玉と白玉の攻玉が行われていたと推測される。また、原石や剥片類が多数出土していることから、調査区と隣接する未調査区に攻玉の中心地域が存在することも想定できる。

調査区からは後期から晩期にわたる土器が出土しているが、攻玉の時期については、安行3b式期から前浦式期が中心時期と考えられる。ただ、千網式土器もやや多く、荒海式土器も出土しているので、晩期後葉の時期になるかもしれない。工房は存在しない。

吉井遺跡

南房総市(旧富山町)に所在する。東京湾から房総丘陵側に入った標高60mの河岸段丘上に位置する遺跡で、490㎡を対象にした調査が行われ、その際に攻玉資料が出土している(神野2003)。

遺物は垂飾の破損成品1点、白玉、丸玉の成品が各1点、原石1点、剥片1点、穿孔を行った不明未成品2点、穿孔途中の丸玉未成品1点、白玉未成品1点、そのほか2点の11点である。いずれも石材は蛇紋岩としている。

関連遺物としては、平板な砥石と中央部が縦方向に窪んだ砥石が出土している。後者の砥石は筋砥石の特徴がみられ、注目しておきたい。調査面積が狭小であり、発掘区外からも攻玉関連遺物が出土する可能性が高いといえよう。

時期については、報告者が述べるように「晩期のものの可能性が高い」という所見にしたがい、周辺から出土した土器から考えると、その後葉期が妥当となろう。この調査では工房は未検出である。

2 県外の攻玉遺跡

今ではやや古くなってしまったが、平成16年に「玉

第1表 千葉県的主要な攻玉遺跡から出土した玉類

遺跡名	時期	原石・剥片等	未成品・破損未成品							成品・破損成品							小計
			垂飾	勾玉	管玉	丸玉	小玉	白玉	不明	垂飾	勾玉	管玉	丸玉	小玉	白玉	不定形不明	
下ヶ戸貝塚	加曾利B式~ 安行3a式	95				5	4	1	13		1		1	2	1		123
下ヶ戸宮前遺跡	安行3b式~ 安行3c式主体	22						1	3	4	3		4	5	2	1	45
子和清水遺跡	千網式	15			1				3	2	1		1				23
武士遺跡	千網式	2						12	4	2		4	4	1	19		48
余山貝塚	晩期後葉	2							5			1	7	6			21
堀之内上の台遺跡	安行3b式~荒海式	75+			2			9				2					88+
吉井遺跡	晩期後葉	2				1		1	4	1			1		1		11

第2表 『日本玉作大観』における後晩期の攻玉遺跡に関する記述

県名	攻玉についての記述
青森県	木造町亀ヶ岡遺跡では、昭和25年の慶應義塾大学の発掘で硬玉製玉1点・凝灰岩製小玉13点・筋砥石、昭和48年の青森県教育委員会の発掘で流紋岩・凝灰岩・安山岩・石英・頁岩製の小玉158点(主体は流紋岩製)と手持ち砥石・筋砥石・玉用石錐(スポール・ドリル)の工具類・ガラス玉、昭和55年～57年の青森県立郷土館の発掘で凝灰岩製の小玉・未成品・原石が360点と手持ち砥石・筋砥石・玉用石錐の工具類、1b号土壙から硬玉製丸玉1点が出土している。
山形県 宮城県 福島県	後晩期になると玉は勾玉・小玉・管玉・垂飾などの小型のものになるが、その数量は中期に比べて増加する。山形・宮城・福島の各県で発見され、山形県玉川遺跡では大量の玉が発見され、攻玉遺跡として知られている。
千葉県	縄文時代の攻玉は、千葉県では8例知られているが、工房跡は明らかでない。(中略)晩期では白玉(市原市武士遺跡)などを製作している。
長野県	後期になると、小形の硬玉製品の攻玉遺跡が北信地域において出現する。現在、一津・宮・円光房の三遺跡で原石や未成品を検出しているが、これらと伴出している球状土製品を攻玉にかかわる穿孔用の勢車と認めるならば、同様の土製品はほかにも中信から東信地域にわたっての数遺跡で出土していることから、後晩期の攻玉遺跡は比較的普遍化していたものと思われる。
新潟県	糸魚川市細池遺跡は数少ない縄文晩期の硬玉の玉生産遺跡で、丸玉・勾玉・管玉および硬玉原石・剥片、各種砥石が検出された。
富山県	境A遺跡：膨大な量の硬玉製の玉類や蛇紋岩製の磨製石斧の原石、未成品が出土している。硬玉原石・加工品・硬玉製玉類は10,915点を数える。 後期～晩期でも、県東部域を中心として蛇紋岩や硬玉製の丸玉、垂飾を集中的に製作する遺跡が現れる。
石川県	小規模な攻玉は、多くの集落で行われていたと推定されるが、多量に未成品を出土する遺跡はいまのところ確認されていない。御経塚遺跡：遺構に伴っていないが、玉類を中心にした50点余が出土している。
三重県	勢和村新神場遺跡は櫛田川左岸に所在する縄文時代後期後葉から晩期にかけての遺跡で、攻玉に関わる遺構は未確認だが玉類の未成品が表面採集されており、玉類製作が行われたと想定されている。

(ゴチックは遺跡名 筆者強調)

作の基礎資料であり、かつ二十世紀における玉作研究の到達点」として、寺村光晴氏を編者として『日本玉作大観』が刊行された(寺村ほか2004)。同書の特徴としては、大きく地域編と時代編から編まれ、それぞれについて、ゆかりの研究者が執筆している。

同書から後晩期の攻玉に関する記述部分を抜き出してみたのが第2表である。県外のあり方について、ここに挙げた遺跡を中心に瞥見しておこう。

ところで、攻玉遺跡を考える際に、一元的ともいえる翡翠の産出地に近いか、そこから遠方に存在するかは考慮する必要があるだろう。その場合でも、どこまでが産出地に隣接する遺跡なのか、基準が必要となろう。ここでは便宜的に、木島勉氏が示した産地A、産地B、産地Cにまとめた範囲、すなわちA：姫川・青海川の上流部、B：同河川の中流域、C：標石のある河口から海岸、という産出地に隣接する遺跡と(木島1995)、そこから離れた地域に立地する遺跡に分けてみておきたい。また、前者を「地域Ⅰ」、後者を「地域Ⅱ」としておこう。当然、千葉県は地域Ⅱに含まれる。

(1) 地域Ⅰの遺跡

細池遺跡

新潟県糸魚川市に所在する。市の東部を流れる早川の河岸段丘上に立地し、海拔約118mから緩やかに北側に向かって傾斜する。調査は昭和47年に遺跡の4地

点を対象に行われている(寺村ほか1974)。

最も広く調査を行った第Ⅲ地点とした調査区を主体に、翡翠の原石や剥片153点が出土したほか、勾玉の欠損品1点、管玉未成品1点や丸玉と考えられる未成品8点が出土している。石材は管玉未成品と丸玉未成品1点が滑石で、ほかは翡翠である。穿孔が認められる未成品が出土していないため、穿孔については明らかでない。ただ、この遺跡を調査する契機ともなった地元の方が所有されていた玉類について、青木重孝氏が報告書の冒頭、本文中写真で紹介しており、その中には穿孔途中の丸玉が認められ、片側穿孔のⅠbになっている。

ほかには攻玉工具とも考えられる筋砥石が多く出土している。遺跡の時期については、晩期前半～中葉に位置づけられている。

なお、報告書の総括において、寺村光晴氏は「縄文時代晩期になると、硬玉原石はかなり遠くまで運ばれている。例えば関東地方の千葉県下においても、集中して硬玉原石が検出されている遺跡がある。しかし、その量は細池遺跡には比すべくもない」と述べている。おそらく印西市天神台遺跡のことをいったのであろう。

寺地遺跡

新潟県糸魚川市(旧西頸城郡青海町)に所在する。日本海へ注ぐ田海川左岸の海拔6m～16mの舌状台地に

立地する。昭和42年から昭和48年にかけて発掘が行われ、中期における大珠の攻玉工房を明らかにしたことで有名である(寺村ほか1987)。

A地区とした遺跡の中央部から晩期の配石遺構や木柱群・組石遺構が検出され、ここから攻玉関連遺物が出土している。報告書の組成表に基づくと、翡翠原石183点、荒割段階・剥片1,325点、垂飾未成品2点、勾玉未成品3点、丸玉未成品8点という内訳である。また、成品として垂飾3点、小玉2点が存在する。翡翠以外では滑石製の垂飾1点、石英の勾玉1点の各未成品と、滑石の垂飾欠損成品1点が出土している。

翡翠の穿孔方向は片側からで、石英製の勾玉未成品は両側から行っている。

工具に比定可能な遺物としては、翡翠製の敲石57点、筋砥石27点、平砥石69点、小形砥石21点が認められ、穿孔工具の部品とも推定されている有孔球状土製品(小島1991)も出土している。土器は亀ヶ岡式や御経塚式、中屋式が多く出土しており、晩期中葉までの間の攻玉遺跡と考えられる。

翡翠原石や剥片類の点数が歴大で、筋砥石や敲石などの工具類も多量に出土している割に、目的としていた成品が分かり得る未成品や欠損成品が極端に少ない。この地点や周辺で攻玉が行われていたのは確かであるが、特徴の1傾向として理解しておきたい。

境A遺跡

富山県下新川郡朝日町に所在する。県の東端で日本海に向かい傾斜する海拔8m~25mの傾斜面に立地する。北陸自動車の建設に伴い調査が行われ、膨大な攻玉資料が検出された。報告書の石器編と総括編を中心に概要に接しておくことにしたい(山本1990 橋本ほか1992)。

攻玉は主に中期と後晩期の大きく2つの時期に営まれたと考えられる。中期においては翡翠製大珠などの攻玉が行われ、後晩期には勾玉、管玉、垂飾、丸玉、小玉、白玉の攻玉が行われたと考えられる。

勾玉は未成品16点、成品15点の計31点が出土し、蛇紋岩、滑石、翡翠が使用されている。穿孔方向に関しては、いずれの石材もI bとII bが認められる。管玉は30点出土している。石材は滑石14点、翡翠11点、蛇紋岩2点、凝灰岩・結晶片岩・不明が各1点である。穿孔断面形状は、I bとII bが存在する。垂飾は多種多様で合計240点出土し、未成品の割合が多い。石材は翡翠が118点と最も多く、次いで滑石65点、蛇紋岩15点などである。穿孔断面形状は、I bとII bの両者が

存在する。丸玉は小玉を含んで573点で、石材では翡翠が49%の281点を占め、蛇紋岩205点、滑石40点などである。穿孔断面形状は、他の玉と同様である。穿孔方法の特徴について、「穿孔途中の未成品をみる限り、管状錐をもちいるものではなくすべて棒状錐」と指摘している。原石や剥片も多量に出土しており、第3表には翡翠加工品とされる点数のみを記載した。この点数が後晩期のいずれの時期に伴うのか、識別は至難と言わざるを得ない。翡翠は遺跡の眼下に広がる宮崎海岸、境海岸、市振海岸で漂着石を拾ってきたか、海中翡翠を手に入れたと推測される。

工具として考えられる筋砥石が1175点と多く、それ以上の平砥石も出土している。敲石も膨大で、翡翠製が全体の48%近くを占めている。土製品では有孔球状土製品が224点を数えている。

遺跡からは加曾利B式並行期から晩期後葉の大洞A式までの土器が出土しており、中断した時期があったかもしれないが、この間に継続的に攻玉が行われていたのであろう。そして勾玉、管玉、丸玉や小玉などの攻玉は、遺跡の後半期に盛行したと考えられる。

工房が存在していた可能性が高いが、実際に何基となると明らかではない。

(2) 地域Ⅱの遺跡

藤橋遺跡

新潟県長岡市に所在する。信濃川の支流である洪海川左岸の海拔30m~50mの緩やかに広がる舌状台地上に立地する。古くから石鏃や玉などが採集できる場所として知られていた。発掘は昭和26年から数次にわたり実施され、昭和53年に「縄文時代の代表的な集落として、また玉作りの遺跡として貴重であることから」国指定史跡になった(長岡市1992)。

玉類は明治以来100点を超す点数が採集されている。採集品には勾玉、垂飾、管玉、丸玉があり、石材は翡翠のほか蛇紋岩、滑石、凝灰岩などが用いられている。発掘では緑色凝灰岩の原石、丸玉、勾玉の成品、勾玉未成品が出土している。成品の穿孔断面形状はI bである。筋砥石などの工具類は確認されていない。

晩期中葉~晩期後葉の土器が多量に出土している状況から、玉類もこの時期に伴う可能性が高い。

中野遺跡

新潟県新発田市に所在する。日本海へと注ぐ加治川支流の海拔60m~62mの段丘面に立地し、1,023㎡の発掘が行われた(田中ほか2014)。

この調査で翡翠原石や剥片、一部研磨を施した未成

品、穿孔を開始した未成品、敲石として用いられたもの計20点出土している。また、研磨痕を認める滑石製やメノウ、石英製の未成品が出土している。しかし、これらには整形まで工程を進めた未成品が存在しないため、目的としていた玉の種類を突き止めることができない。成品は垂飾3点、勾玉1が存在する。工具と考えられる遺物には、砂岩製の棒状・板状・筋の各種砥石が存在し、板状の珪化木製の砥石は仕上げ用と推測されている。帰属時期は晩期前葉と考えられる。

遺跡は、翡翠原産地から200km近く北に位置しており、しかも海岸線から17km内陸側に所在するという立地環境にも拘らず、翡翠や緑色の発色を呈する石英を入手して、攻玉を行っていた点が注目される。成品が出土せず、工程が進展した段階の未成品が出土していない状況を、どのように評価するか、問題を含む攻玉遺跡といえよう。

一津遺跡

長野県大町市に所在する。木崎湖の東岸で海拔766m～800mの山腹に立地する。A地区とB地区に分けて調査が行われ、木崎湖に寄ったJR大糸線の西側であるA区から多くの玉が出土している(島田ほか1990)。

出土した玉類の全点数の詳細は定かでないが、100点について実測図が提示されている。玉の石材は翡翠と滑石である。

まず翡翠を素材とする玉としては、14点の未成品が挙げられており、垂飾や丸玉の攻玉が行われていたことが分かる。成品には垂飾2点、丸玉8点が存在する。成品10点の穿孔断面形状は、3点がI bで7点がII bのようである。わずかに穿孔を行っている未成品にも、片側からと両側からが存在する。翡翠の原石や剥片も多数出土しており、具体的な点数は不詳であるが、2,000g以上が出土しているとみられる。

滑石製玉類について、翡翠と同様に報告書の図98・99に基づいて分類すると、管玉3点と丸玉3点の未成品が存在するほかに21点で、計27点が掲載されている。成品は勾玉9点、垂飾12点、管玉9点、丸玉8点、小玉8点、白玉1点、不明2点に分類し計49点になる。原石や剥片の点数は不明であるが、多量に検出されている。成品の穿孔断面形状は、大部分がII bである。

工具と推定される遺物として、筋砥石や平砥石、有孔球状土製品が出土している。翡翠原石については、姫川を下って採取したのか、さらに50km先の河口か海岸まで行って拾ってきたと考えられる。ただ、小谷村や白馬村において翡翠の産出が知られているので(宮

島2019)、比較的近傍で入手した可能性も捨てきれない。

出土土器は、後期前半から晩期後半にわたり、特に晩期後葉の土器が豊富である。状況から推測し、攻玉もこの時期の所産である可能性が高いといえる。工房が存在する可能性があるが、明瞭な遺構は未検出である。

円光房遺跡

長野県千曲市(旧埴科群戸倉町)に所在する。千曲川流域の左岸、扇状地形を呈する海拔385m前後の台地上に立地する。8,500㎡について発掘が行われ、縄文時代中期後葉の竪穴住居や晩期の包含層、配石墓等が検出された(原田ほか1990)。

玉関連資料は包含層と竪穴住居から出土している。包含層から出土したのは、翡翠製の丸玉状の成品2点、滑石製の管玉未成品1点、研磨が認められる翡翠原石1点と翡翠原石1点である。また、晩期の竪穴住居から垂飾の成品1点と破損成品1点が出土し、丸玉状の成品は片側から穿孔が行われている。工具と考えられる遺物として、有孔球状土製品が出土している。これらの遺物が出土したことにより、攻玉遺跡の可能性が指摘され、その時期は佐野I a式期から佐野I b式期と考えられている。

この調査では、具体的に攻玉の工程が分かる資料は出土していない。将来の調査機会に期待したい。

玉川遺跡

山形県鶴岡市(旧東田川郡羽黒町)に所在し、大正の初期から玉が出土する遺跡として知られていた。遺跡は庄内平野に続く扇状地形の海拔85m～140mの斜面に展開し、扇端側からA地点～E地点の5か所の地点名が付けられている(柏倉ほか1973)。C地点の発掘で、管玉12点、丸玉3点、勾玉1点がトレンチ内から検出されており、いずれも成品である。勾玉以外の石材は翡翠に比定されている。ただ、調査によるものばかりでなく、個人が採集した玉類が多く、小林圭一氏は「多量の玉類が採集されてきたにも拘らず、実測図が公表された例は極めて少なく、採集されたヒスイ製品の正確な数量も定かでない」と指摘しており(小林2005)、攻玉遺跡としての実態は捉えられていないのが実情のようである。

亀ヶ岡遺跡

青森県つがる市(旧西津軽郡木造町)に所在する。岩木川が東に間近に山田川が流れる海拔7m～18mの亀山丘陵といわれる低丘陵上に立地する。

玉に関しては第3表のように、小玉が多量に発見さ

第3表 地域Ⅰ・地域Ⅱの主な攻玉遺跡から出土した玉類

遺跡名	時期	原石・剥片等	未成品・破損未成品							成品・破損成品							小計
			垂飾	勾玉	管玉	丸玉	小玉	白玉	不明	垂飾	勾玉	管玉	丸玉	小玉	白玉	不定形不明	
細池遺跡	晩期前半～中葉	153			1	8						1					163
寺地遺跡A地区	晩期中葉	1508	3	4		8				4				2			1529
境A遺跡	加曾利B式並行～大洞A式	(8159)	140	16	20	451				100	15	10	122				9033
中野遺跡	晩期前葉	12	1						13	3	1						30
一津遺跡(翡翠製)	称名寺式並行～晩期後葉	多数	1			6			7	2			8				24+
一津遺跡(滑石製)	称名寺式並行～晩期後葉	多数			3	3			21	12	9	9	8	8	1	2	76+
一津遺跡 小計		多数	1	0	3	9	0	0	28	14	9	9	16	8	1	2	100+
亀ヶ岡遺跡 昭和25年 慶應義塾 沢根地区	大洞C2～大洞A式	24				1							1				26
亀ヶ岡遺跡 昭和25年 慶應義塾 近江沢	大洞C1式・C2式												1				1
昭和48年 亀ヶ岡遺跡 青森県教委S地点	晩期中葉～後葉					6							3				9
亀ヶ岡遺跡 沢根地区	大洞C1式～大洞A式	229				79							4	1			313
亀ヶ岡遺跡 近江沢地区	大洞C2式・大洞A式	3				1											4
亀ヶ岡遺跡 雷電宮地区	大洞BC式～大洞C2式	7	1										1				9
つがる市教委 亀山36-1地点	晩期前葉～中葉											1	1		120		122
つがる市教委 亀山49-1・2地点	晩期末葉			1					1				1				3
つがる市教委 沢根83-9地点	晩期												1				1
亀ヶ岡遺跡 小計		263	1	1	0	87	0	0	1	0	0	1	13	1	120	0	488

れている特徴がある。青森県立郷土博物館が昭和55年～昭和57年に実施した調査で、玉類原石と未成品などが出土している(鈴木ほか1984)。特に沢根地区の調査では、200点を超す原石や80点近い未成品が出土している。調査は発掘主体や地点が細かく分かれているので、令和元年につがる市教育委員会が刊行した総括報告書に基づき(羽石ほか2019)、地点別に集計した。この表の中で調査主体を記していない成果は、青森県立郷土博物館の調査によるものである。

玉類の種類は、丸玉と白玉が圧倒的に多く、ほかにわずかな垂飾、勾玉、管玉が出土している。石材はほぼ緑色珪質凝灰岩が占めている。この石材は津軽地方に広く分布しており、小型の円礫が使用されていることから、津軽半島西海岸での採集が推定されている。その小円礫から、成品に仕上げたと考えられる亀山36-1地点で検出された白玉は、穿孔は両側から行われ断面形状はⅡbを呈する。攻玉工具と推定される遺物

として石錐、筋砥石が存在する。

時期については、晩期前葉～後葉にかけて継続したと考えられているが、開始時期については後期中葉から後葉頃まで遡る可能性を残していると、今後の課題を提起している。

3 千葉県と他地域の特徴

(1) 千葉県の特徴

ここまで千葉県とほかの地域に所在する代表的な攻玉遺跡について、報告書から明らかになった玉の種類や石材等を抜き出してきた。まず、本県における攻玉の在り方について、記述した内容と第4表に基づき総括すると、下記のような特徴を見出すことができる。

- ① 生産していた玉類は、管玉、丸玉、小玉、白玉で、垂飾も可能性がある。
- ② 石材は、滑石や蛇紋岩が主で、遺跡によっては翡翠も存在する。

- ③ 穿孔の断面形状は、滑石や蛇紋岩はⅡb・Ⅱb'が多くを占め、翡翠は片側からが多く、断面形状はⅠbである。
- ④ 工具は、その可能性がある遺物に砥石が存在するが、ほかに比定できる遺物は見当たらない。
- ⑤ 時期は、晩期中葉から後葉に集中し、後期の状況は判然としない。
- ⑥ 工房は、確認できない。

補足するならば、垂飾については子和清水遺跡の種類不明とした未成品の中に、垂飾を目的にして作業を開始し、その初期段階と考えられるものが含まれているので、垂飾の攻玉も否定はできない。勾玉については、現状では攻玉を行っていた遺跡は存在しないといえよう。

次に玉の素材になった石材はどうであろうか。後期の下ヶ戸貝塚と同じく下ヶ戸宮前遺跡、晩期の余山貝塚では、翡翠の原石・剥片や未成品が発見されており、翡翠の攻玉が行われていたと推測される。しかし、翡翠は主要な石材ではなく、大部分を占めていたのは滑石や蛇紋岩と鑑定された石材である。

未成品の観察から分かった穿孔方向にもふれておきたい。滑石製や蛇紋岩製では、厚みを持たない白玉や

丸玉をはじめ縦に長い管玉などは、両側からの穿孔が行われ、穿孔断面形状はⅡbになる。翡翠を素材とする玉はⅠbが多いがⅡbも存在する。

攻玉の時期については、後期の状況がはっきりしない。先に挙げた下ヶ戸貝塚でこの時期の攻玉を行っていた可能性があるし、今回は取り上げていないが県北部のいくつかの遺跡において行っていたかもしれない⁸⁾。しかし、後期の集落を発掘した佐倉市宮内井戸作遺跡(小倉2009)を1つの例としても、そこで発見された数多くの翡翠製を主体にした玉類の供給元に、県内の攻玉遺跡を充てることは無謀である。多くが地域Ⅰからの搬入と考えるのが無理のないところである。

(2) 地域Ⅰの特徴

翡翠産出地に隣接する遺跡について、木島勉氏は「中期に比べると遺跡数は少ない」と指摘している(木島1995)。遺跡は確かに多いとはいえないが、多量の翡翠原石には目を奪われる。ここでのあり方は下記のように指摘できよう。

- ① 生産していた玉類は、垂飾、勾玉、管玉、丸玉、(小玉)、(白玉)で、特に境A遺跡における生産量は圧倒的である。
- ② 最も多い石材は翡翠で、ほかに蛇紋岩、滑石、

第4表 代表的攻玉遺跡の特徴比較

比較項目	①玉の種類							②穿孔方向 上：翡翠 下：翡翠以外				③石材					④工具				⑤時期			⑥工房			
	原石・剥片等	垂飾	勾玉	管玉	丸玉	小玉	白玉	I a	I b・I b'	II a	II b・II b'	翡翠	滑石	蛇紋岩	緑色珪質凝灰岩	その他	錐	有孔球状土製品	有溝砥石	平砥石	敲石類	後期	晩期前葉	晩期中葉	晩期後葉	後期～晩期	
千葉県	下ヶ戸貝塚	◎			◎	○	△		◎			○	◎			○				△		△	△				
	武士	△			△	△		◎			◎		◎												◎		
	堀之内上の台	◎			△	△		◎		△	△		◎											◎	○		
地域Ⅰ	細池	◎		△	△	◎			◎			◎	△						○	○			○	○			
	寺地	◎	△	△		◎			◎		○	◎	△		△			○	○	◎	◎			◎			
	境A	◎	◎	○	○	◎	◎	△	◎	◎	◎	◎	○	△		△		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
地域Ⅱ	中野	○	△	△								◎			△				○	○			○				
	一津	◎	◎	○	○	◎	○	△		◎		◎	◎					○	○	○		△	△	△	◎		
	亀ヶ岡	◎				◎		◎			◎			◎		○						△	○	◎	◎		

凡例 ◎：多い ○：やや多い △：可能性あり 空欄：現時点では無し、あるいは不明 (遺跡ごとの相対)

凝灰岩、結晶片岩、石英を使用する。

- ③ 穿孔の断面形状は、翡翠やその他の石材に、穿孔ⅠbとⅡbが認められる。
- ④ 工具は、有孔球状土製品、筋砥石、平砥石、敲石類がある。
- ⑤ 時期は、境A遺跡で後期の加曾利B式並行期から晩期後葉まで存在する
- ⑥ 工房は、境A遺跡に存在していた可能性がある。

この地域は当然のこととして、翡翠を材料にした攻玉が行われ、ほかに蛇紋岩など千葉県などでも選択された石材も加わる。丸玉や小玉などの穿孔断面形状は、円筒形となるⅠaやⅡaは認められず、中期に盛行をみせた大珠に使用されたと考えられる管錐を用いての穿孔は 晩期には確実に姿を消している。

工具として、有孔球状土製品を加えた。この土製品の用途としては翡翠穿孔の弾み車説と(小島1991)、紡錘車説(藤田1998)があるが、暫定的に弾み車説にしたがった。

(3) 地域Ⅱの特徴

千葉県を除く翡翠産出地から遠方に所在する攻玉遺跡の特徴をまとめると、次のようになる。

- ① 生産していた玉類は、垂飾、管玉、丸玉、白玉である。
- ② 石材は緑色珪質凝灰岩、翡翠、滑石、蛇紋岩、凝灰岩、メノウ、石英が認められる。
- ③ 穿孔の断面形状は、ⅠbとⅡbが認められる。
- ④ 工具は、有孔球状土製品、筋砥石、平砥石、敲石類がある。
- ⑤ 時期は、称名寺式並行期から晩期後葉まで存在する。
- ⑥ 工房は、確認できない。

一口に翡翠産出地から遠方に所在するといっても、50km内陸に入った一津遺跡と、630km近く離れた亀ヶ岡遺跡では相当の隔りがある。一津遺跡からは、翡翠と滑石の原石・未成品が多量に検出されており、地域Ⅰの遺跡とあまり遜色がない。新発田市に所在する中野遺跡が200km離れるが、翡翠が多く出土している。

亀ヶ岡遺跡の沢根地区からは、在地に産出する緑色珪質凝灰岩の原石や未成品が多量に検出されているが、翡翠が原石として搬入されている状況は顕著ではない。

4 まとめ

千葉県と各地の攻玉遺跡とされる遺跡を取り上げ、それぞれについて特徴を再確認してきた。この作業を

とおして改めていえることは、はじめに述べた水ノ江氏の定義を満たすような攻玉遺跡というのは、境A遺跡を除くとほとんど見当たらないということである。この点については鈴木克彦氏も指摘しており⁹⁾、著名な細池遺跡や玉川遺跡にしても、原石や未成品の存在を、攻玉遺跡とする第Ⅰの根拠にしている。したがって、ここで取り上げた遺跡が、攻玉遺跡に該当しないとはいえない。

千葉県では、典型的な鯉節型大珠が堀之内式期まで残ることが知られている(小林2017)。その後垂飾をはじめ、翡翠製玉類の種類が増加していく。後期後半に下ヶ戸貝塚のほか、流山市三輪野山貝塚(小栗2003)などで、翡翠を含む滑石を素材にした攻玉が行われていた可能性があるが、詳細は明らかではない。ただ、後期には様々な状況から考えて、境A遺跡をはじめとする地域Ⅰの攻玉遺跡によって作られた成品と同時に、翡翠原石も搬入されたのは疑いのないところである。

晩期になると玉類の組み合わせに変化が起こり、それに伴い各地に攻玉遺跡が出現する。千葉県内では、滑石や蛇紋岩が主たる石材として選ばれ、わずかに供給された翡翠の加工も行われていた。そして後葉期の千網式期には、ほぼ滑石や蛇紋岩中心の攻玉になっていく。

同じ地域Ⅱの遺跡である一津遺跡や中野遺跡では、多くの翡翠原石が検出されており、それに滑石を材料として採用し、需要への対応を図ったと考えられる。一方で、亀ヶ岡遺跡では、近傍に産出する緑色珪質凝灰岩に特化した攻玉が行われており、数量獲得が最優先であったと推測される。

地域Ⅰの遺跡では、翡翠製の玉類が後晩期をとおして作られ、各地に供給された。繰り返しになるが、地域Ⅱの遺跡では、翡翠は原石でも供給されていたと考えられるが、それは主に丸玉・小玉・白玉の攻玉に限定されて用いられていたとみられる。各地から出土する翡翠の供給元は、晩期末葉に至るまで地域Ⅰであり、特に勾玉や垂飾の攻玉は、その地域が独占的に担い続けていたことがうかがわれる。

地域Ⅱでは比較的近傍に産出する石材を用い、さらには成品と共にわずかに搬入される翡翠を原材料とし、地域事情による需要に応えるために、小型の玉類を専らとした攻玉遺跡が存立したというのが実態になろう。

千葉県には、小規模な攻玉遺跡が突出して密に分布する状況が認められる。全容が捉えられない遺跡も多いが、県内の分布状況については再考したい。

また、後期のいつの段階で、攻玉遺跡が地域Ⅱに拡散していくのか判然としないので、消費地での最終的なあり方、さらに穿孔方法が管錐から石錐などに变化する時期など、成品から得られる情報から迫っていきそうである。

今回は各地の攻玉遺跡から出土した資料を実見する必要があると考えて一部実施したが、急速な新型コロナウイルスの感染拡大という状況から、控えることが適切と思い、後日に期することとした。したがって、報告書に基づき判断した部分が多く、読み間違いや勘違いがあるかもしれない。ご容赦をお願いしたい。

小稿を執筆するにあたり、次の機関・方々にお世話になり、ご指導をいただきました。記してお礼を申し上げます。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉市埋蔵文化財調査センター、夷隅郡大多喜町教育委員会 伊藤睦憲、小高春雄、加藤正信、西野雅人の各機関、各氏。

注

- 1) 長野県の松本盆地に所在する淀の内遺跡から大珠の成品や翡翠の原石・剥片が出土している(和田2001・2004)。長さ5cmを超す原石が6点出土しており、断定はできないものの、大珠の攻玉が行われていた可能性がある。
- 2) 竹袋遺跡(寺村ほか1986)と報告された遺跡は、『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』(千葉県教育委員会1997)では、天神台遺跡として登録されており、これにしたがっている。
- 3) 穿孔断面形状分類図の作成において、五十嵐睦氏作成の「穿孔方分類」(五十嵐2007)の図と、鈴木克彦氏の「丸玉、小玉、平玉の研究展望」(鈴木2013b)を参考にさせていただいた。
- 4) 千葉県埋蔵文化財センターのご厚意により、報告書非掲載の遺物を実見させていただいた。
- 5) 千葉県教育庁教育振興部文化財課森宮分室において資料を実見させていただき、再集計を行った。
- 6) 長年にわたり余山貝塚の研究をされてきた伊藤睦憲氏のご厚意により、資料の実見および計測と、写真の掲載についてご承諾をいただいた。
- 7) 夷隅郡大多喜町教育委員会のご厚意により実見することができ、写真の掲載についてご承諾をいただいた。
- 8) 流山市三輪野山貝塚や(小栗2005)、國學院大學考古学資料館に寄贈されている小野良弘氏踏査収集の八千代市神野遺跡、佐倉市神楽場遺跡の玉類は(青木ほか1989)、後期の攻玉遺跡に属する可能性がある。特に三輪野山貝塚では、「第3貝塚北端(後期中葉)の調査区では、ヒスイの原石や剥片が集中して出土するエリアがある。攻玉の時期とエリアが絞り込めそうである」とのことである。
- 9) 鈴木克彦氏は、「攻玉つまり玉作(遺跡)の定義は、原石、未成品、剥片、チップ類、工具(穿孔具、加工具、つまり石錐、石針、台石、敲石、石槌、砥石、擦切具、石鋸)、研磨材などの工作や工作工程が分かる遺物のほかに、工作を裏付ける

施設(遺構)が検出されていることが条件である。しかし、その全ての条件を満たすのは境A遺跡だけである」と、定義に完璧に一致する遺跡の少なさを指摘している(鈴木2013a)。

引用・参考文献

- 青木 豊ほか 1986『余山貝塚資料図譜』國學院大學考古学資料館
青木 豊ほか 1989『國學院大學考古学資料館要覧—小野良弘氏旧蔵資料—』國學院大學考古学資料館
五十嵐睦 2007「硬玉製品の製作と交易」『縄文時代の考古学 6 ものづくり』同成社
石田守一ほか 2014『下ヶ戸貝塚Ⅰ』我孫子市教育委員会
石田守一ほか 2021『下ヶ戸貝塚Ⅷ』我孫子市教育委員会
石橋宏克ほか 1991『銚子市余山貝塚—高田川災害関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(財)千葉県文化財センター
大賀克彦 2008「総論 玉研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』No.567 ニュー・サイエンス社
大坪志子 2015「序章 2. 縄文時代の装身具」『縄文玉文化の研究 —九州ブランドから縄文文化の多様性を探る—』雄山閣
大場盤雄 1952「粟島臺遺跡に對する一考察」『上代文化』第二十二輯 國學院大學考古学会 マンガ銚子の歴史刊行会 2022『上代文化』第二十二輯 復刻版
小倉和重 2009『宮内井戸作遺跡(旧石器時代編)(縄文時代本文・分析編)』(財)印旛郡市文化財センター
小栗信一郎 2005「千葉県流山市三輪野山貝塚出土の玉類(1)」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
柏倉亮吉ほか 1973『玉川遺跡』羽黒町教育委員会
神野 信 2003『吉井遺跡 —一般農道整備事業平群地区埋蔵文化財調査業務—』(財)総南文化財センター
木島 勉 1995「縄文時代における翡翠製玉類の生産 —研究の現状と課題—」『フォッサマグナミュージアム研究報告』No.1 フォッサマグナミュージアム
小島俊彰 1991「有孔球状土製品と硬玉製小珠」『縄文時代』2 縄文時代文化研究会
小林清隆ほか 1992『研究紀要』13 (財)千葉県文化財センター
小林清隆 2004「房総の攻玉遺跡」『史館』第33号 史館同人
小林清隆 2017「房総における縄文時代後晩期の石製玉類概観」『千葉縄文研究』7 千葉縄文研究会
小林圭一 2005「山形県内出土ヒスイ製石製品について」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
柴田 徹 2021「下ヶ戸貝塚出土石器石材の同定分析結果総合報告」『下ヶ戸貝塚Ⅷ』我孫子市教育委員会
島田哲男ほか 1990『一津 —内陸における縄文時代玉作り遺跡—』大町市教育委員会
鈴木克彦ほか 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館
鈴木克彦 2013a「縄文時代玉文化研究の展望」『玉文化』第10号 日本玉文化研究会
鈴木克彦 2013b「丸玉、小玉、平玉の研究展望」『玉文化』第10号 日本玉文化研究会
高柳圭一ほか 1996『市原市武士遺跡1 —福増浄水場埋蔵文化財調査報告書—』第2分冊 (財)千葉県文化財センター
田中耕作ほか 2014『中野遺跡・庄道田遺跡発掘調査報告書 —県営担い手育成基盤整備事業(加治川右岸地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』新発田市教育委員会
田中 靖ほか 1988『北陸自動車道 糸魚川地区発掘調査報告

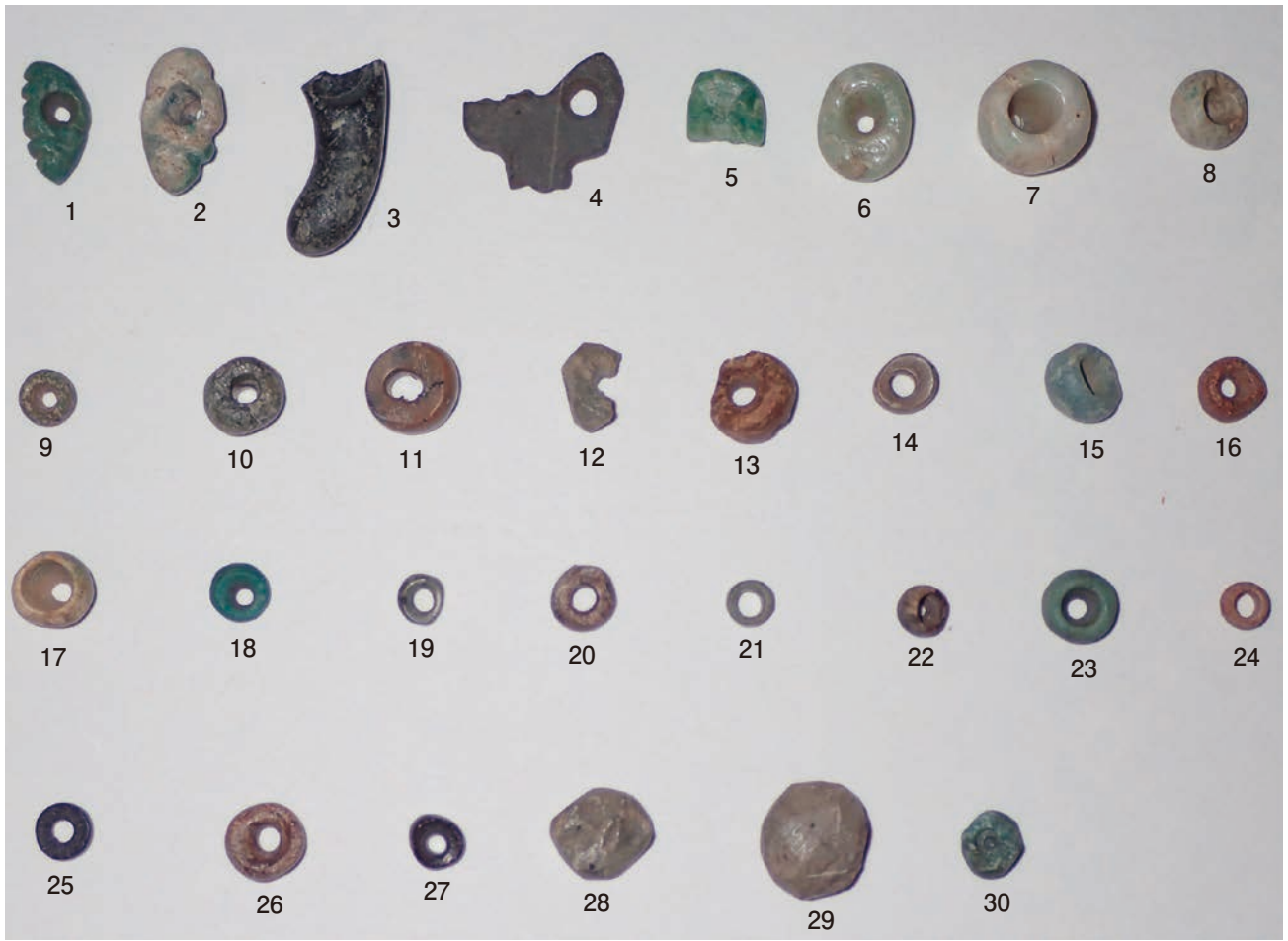
書Ⅳ 原山遺跡 大塚遺跡 新潟県教育委員会
 千葉県教育委員会 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) 一
 東葛飾・印旛地区(改訂版)一』(財)千葉県文化財センター
 寺門義範 1979『千葉県 大多喜町堀之内上の台遺跡』夷隅郡
 教育委員会
 寺村光晴ほか 1974『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
 寺村光晴ほか 1987『史跡 寺地遺跡 新潟県西頸城郡青海町
 寺地遺跡発掘調査報告書』青海町
 寺村光晴ほか 2004『日本玉作大観』吉川弘文館
 橋本正春ほか 1992『北陸自動車道遺跡調査報告 一朝日町編
 7一 境A遺跡総括編』富山県教育委員会
 原田政信ほか 1990『円光房遺跡 長野県埴科郡戸倉町更級地
 区県営ほ場整備事業に伴う幅田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調
 査報告書』戸倉町教育委員会
 羽石智治ほか 2019『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書』つ

がる市教育委員会
 藤田富士夫 1998『糸紡ぎの縄文紡錘車』『縄文再発見』大巧社
 水ノ江和同 2007『縄文時代のものづくりと組織』『縄文時代
 の考古学6 ものづくり』同成社
 宮島 宏 2019『翡翠ってなんだろう2019』フォッサマグナ
 ミュージアム
 築瀬裕一ほか 1987『千葉市子和清水遺跡 房地遺跡 一枚田
 遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
 山本正敏 1990『北陸自動車道遺跡調査報告 一朝日町編5一
 境A遺跡 石器編』富山県教育委員会
 和田和哉 2001『淀の内遺跡Ⅳ』長野県山形村教育委員会
 和田和哉 2004『長野県山形村淀の内遺跡 一ヒスイ原石・剥
 片・大珠・垂飾が出土した縄文中期遺跡一』『玉文化』創刊
 号 日本玉文化研究会

付表 伊藤睦憲氏所蔵の余山貝塚玉類属性表

(No.は図版の遺物番号に対応)

No.	種類	石材	長径 (mm)	短径 (mm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	穿孔	特徴
1	勾玉	アベンチュリン石英	14.34	7.58	4.94	0.7	I b	濃緑色の石材
2	勾玉	(翡翠)	17.78	8.96	7.96	1.4	II b	
3	勾玉	滑石	(24.45)	(11.45)	(8.27)	(2.8)	II b'	破損未成品
4	背合せ勾玉	粘板岩	(19.58)	(14.47)	3.52	(1.4)	I b	成品欠損品
5	垂飾	(翡翠)	(9.02)	9.45	3.79	(0.5)	II b	破損未成品
6	垂飾	翡翠	13.85	11.02	6.26	1.7	I b	
7	丸玉	翡翠	13.48	12.40	11.15	2.7	I b	
8	小玉	翡翠	9.66	9.56	4.93	0.7	I b	
9	小玉	不明	6.35	6.20	4.53	0.2	II b	
10	小玉	(滑石)	9.17	9.15	6.51	0.8	II b'	
11	白玉	滑石	10.83	10.68	6.41	1.2	II a	
12	白玉	滑石	10.81	(7.41)	6.78	(0.5)	II b'	破損未成品
13	白玉	滑石	10.95	9.90	7.22	(0.8)	II b'	破損成品か
14	白玉	滑石	7.55	6.74	4.11	0.3	I aか	
15	小玉	翡翠	9.50	8.33	6.99	0.8	I b'	
16	小玉	不明	7.41	7.36	3.78	0.3	II b	透明感のない茶褐色の石材
17	小玉	翡翠	8.73	8.34	7.08	0.7	I b	
18	小玉	(アベンチュリン石英)	7.03	6.91	4.35	0.3	I b	濃緑色の石材
19	白玉	滑石	6.73	6.31	2.08	0.1	I aか	
20	白玉	滑石	8.28	7.70	3.94	0.3	I aか	
21	白玉	滑石	5.43	5.33	2.96	0.1	I aか	
22	小玉	滑石	5.82	5.71	4.52	0.1	I b	
23	小玉	(ネフライト)	8.62	8.41	5.41	0.5	I b	
24	小玉	不明	5.65	5.65	3.85	0.1	I aか	透明感のない茶褐色の石材
25	白玉	滑石	6.74	6.33	2.27	0.1	I aか	
26	小玉	滑石	9.04	8.87	4.71	0.6	II b	
27	小玉	滑石	6.54	5.76	4.28	0.2	I b	
28	丸玉	滑石	11.02	9.96	5.41	0.9		未穿孔未成品
29	丸玉	滑石	13.55	12.04	8.91	2.2		未穿孔未成品
30	小玉	滑石	6.81	6.27	4.56	0.3	II b	穿孔開始段階 未成品



余山貝塚の玉類(伊藤睦憲氏所蔵資料)



堀之内上の台遺跡の原石・剥片・管玉未成品(大多喜町教育委員会蔵)